『ちょうちょになって』

令和５年度

知念こども園　３歳児～５歳児

実践者：中本絹枝、新垣紗希、仲村隼、當眞真依子、上地奈菜香、宮平希、
高橋美希、知念洋子、仲田朋弘、與儀和歌子、熊田紫香

【テーマ】地域文化継承における幼児教育

【目的】知念地域の自然を感じ地域の文化に興味・関心を持ち
自分なりの表現をする

知念こども園の子ども達は、園庭に集まるオオゴマダラ等を捕まえて、卵から幼虫、蛹と成長していく様子の段階を発見をしながら、不思議さや育てる楽しさを感じるている。この経験をこれから教諭がねらいをもって意図的な遊びの展開を広げることが重要であると考え、今年度は表現を意識し、どのような表現遊びを展開するか子ども達と共に保育を創り出していきたい。

【昨年の取り組みの振り返りから】

最初に導入の仕方やきっかけづくりを職員で話し合い、子どもが興味や関心を持ってくれるようにということを前提に取り組みを始める。子ども達が蝶々に興味・関心を持ったところで『胡蝶の舞』のDVDをみんなで観る。そこから子ども達がどのような遊びに発展させていくのかを、予想したり環境の準備をしたりすることを意図して保育をするようにした。『胡蝶の舞』を観た後は、子ども達が蝶々の羽づくりをしたり、動きを真似る子が出たり、ゲームに蝶々のイメージをくっつけたりして遊ぶ姿が見られた。

１年目の取り組みとしては、子ども達の遊びの発展を見ることができた事と、導入の仕方やタイミングなどで子どもの注目や興味が変わるという事、そして子どもの遊びの発展などを予想していろいろな準備をすることの必要性などをとても感じた。

【昨年の取り組みから今年の取り組みの構想】

昨年の取り組みの中で、遊びの発展も見られ、『胡蝶の舞』のDVDを観て動きを真似る子はいたが、踊りを真似て楽しむ子が少なかったという話が出る。今年は踊りを真似たり、自分達で蝶々をイメージして、踊りを創作する子が出てこないかなと考えた。また、卵から幼虫、蛹、蝶々などのを子ども達が踊りなど表現を楽しんだことができるといいなと考えた。その為には、その成長の過程を実際に見ることができたら子ども達にとっていい経験にもなり、イメージして表現しやすくなるのではと思い、そうなってくれるといいなと考えていたが導入のタイミングや方法がなかなか定まらなかった。

〈エピソード　1〉　たまごを産んだよ！

５歳児クラスのKくんが園庭でオオゴマダラの蝶々を捕まえた。一度は家に持って帰るが次の日、園で蝶々を育てたいと持ってくる。虫かごでは小さくてかわいそうということで、園にあるかごを出すが、それでは逃げてしまう。「じゃあ、網をかけよう」などいろいろ考えて蝶々の家が完成！(昨年はかごにビニールをかけ、穴をあけていた。)そこに蝶々を入れると一緒に入れていたホウライカガミの葉っぱに卵が３０個産まれていて皆で喜ぶ。

これなら逃げないよね！

捕まえたちょうちょがたまごを産んだよ。さあ、みんなで育てよう！

卵から蝶々を育ててみたいという子どもの声を聞き、園で育てていく為の『やくそくごと』を５歳児クラスが話し合うことに。みんなが成長を見れるように設置場所は玄関ホールの畳スペースに決定。また、いろいろとお家で調べてきた子が蝶々の名前、好きな花や葉っぱは何かなどをみんなに教えてくれた。玄関ホールに設置することで、子ども達だけでなく保護者も観察したり子どもとの話のきっかけになった。

〈エピソード　2〉

見てみて～。はっぱに
いくつたまごがついて
いると思う？

白いのときいろいのとか
いろんなのあるね～。

卵が孵化して幼虫になる。孵化したての幼虫はとても
小さくて白いことに子ども達も職員もびっくり。

「幼虫に黒と白の模様が出てき
たよ！」「なんか赤い点々も
出てきた～！」毎日、子ども
達が発見していく。

「お母さん見て！僕が捕まえたオオゴマダラのちょうちょだよ！」

４歳児のGくんがオオゴマダラを捕まえ、この蝶々も卵を産む。この卵は４歳児クラスで育てる
ことに。４歳児クラスにはオオゴマダラだけでなく他の蝶々も卵から蝶々まで育てることに。

〈エピソード　3〉　幼虫が大きくなるにつれ・・

葉っぱをよく食べうんちをたくさんするので、虫かごの中はすぐに幼虫のうんちで
いっぱいになる。子ども達から「虫かごを掃除してあげる」という声が出てくる。

やさしくつかんで
あげてね！！

まずは、１匹ずつ
幼虫を外に出すんだ。

全部移したから、虫かごの中のうんちを捨てて、きれいに拭いてあげよう。

うんちたくさんしたら、お腹すくよね。
ホウライカガミの葉っぱをあげよう！！

幼虫がだんだん大きくなって、いつでもさなぎ
になれるようにと幼虫を虫かごから大きめの
ゲージに移動させることに。

幼虫大きくなったね～。そろそろさなぎになるかなあ～。
いつでもさなぎになれるようにしてあげよう！

〈エピソード　4〉　幼虫がさなぎになったよ！

ある朝、早めの登園をしていた子ども達と職員が幼虫が蛹になるところを目撃！

この黒いのを落とそうとしてる～。ぷりぷり動いてる。
あと少し～がんばれ～！！(動画あり)

登園してきた子ども達は、きれいな金色の蛹に大興奮。保護者の方も、初めて見る方もいて子どもだけでなく保護者の方も興味津々。幼虫の時は「こんなにあると気持ち悪い～」と言っていた保護者の方も「あの幼虫がこんなにきれいな蛹になるんだね」と驚いていた。

〈エピソード　5〉　落ちてるさなぎを助けたい。

たくさんの蛹の中で、ひとつの蛹が下に落ちていることに気づいたKちゃん。「かわいそう。つけてあげたい」といろいろ方法を考える。「糸でつける」「難しい」いろいろ考えた結果、洗濯ばさみでつけることに。ただ、まだやわらかい蛹を洗濯ばさみではさんでつけるのは大人でも難しく、結局少し潰れてしまい育たなかったが、Kちゃんの気持ちは嬉し汲み取ってあげたい。

〈エピソード　6〉　ちょうちょを逃がそう！

蛹から出たばかりの蝶々は羽が濡れていて、羽もぴんとしていないのですぐには飛ぶことができないなど、いろんなことに気づいた子ども達。
飛ぶ準備ができた蝶々達を逃がすことに。オオゴマダラのひらひらと舞う優雅な飛び方を見てほしいという思いから、遊戯室に１３羽逃がしてひらひら舞うのを見た後、窓を開けて外へ逃がした。

園として、オオゴマダラを卵から蝶々になるまでの過程をみてきたのと同時進行で、４歳児クラスでは虫が大好きな子が多く、いろんな蝶々の卵を見つけては孵化させて蝶々にすることに成功。知念こども園の園庭には、いろんな種類の蝶々がいて、それぞれ卵から幼虫、蛹から蝶々になるまでの過程を見て、最後はクラスのテラスから蝶々を逃がすということを何度も経験することができた。クラスにはいくつかの虫かごと図鑑が用意されている。子ども達が図鑑をひろげて、いろいろ調べようとする姿もあった。

〈蝶々を育て、逃がすという経験をした子ども達の製作表現〉

５歳児の蝶々の絵の表現
４歳児の蝶々の粘土の表現
それぞれが好きに表現している。蜜を吸っている蝶々、飛んでいる蝶々、卵や蛹と蝶々、みんなで逃がした蝶々など、それぞれが印象に残っている蝶々を自由に表現している。その他、塗り絵をしたりいろいろな製作を通しての表現を楽しむ。

【園内研修での職員の話し合い】

・オオゴマダラの蝶々を卵から育て逃がすという体験をしたタイミングで、すぐに職員での話し合いが持てずにうまく子ども達に導入することができなかった。そこで、今からどういう風にまた子ども達と蝶々の表現に取り組んでいけるかを考える。
・蝶々を育て逃がしたタイミングで各クラスで絵を描いたり、粘土で蝶々を作ったりすると子ども達それぞれのイメージで思い思いのものができた。
・表現と言ってもいろんな表現があるので、幅が広すぎて難しいということだったので、身体で表現するというのはどうかということになった。
・「胡蝶の舞」を真似するのではなく、知念こども園の「蝶の舞」を子ども達が創作してくれたら一番すごいねということになった。これを最終のねらいとする。すぐに踊りというのは難しいので、まずは子ども達がイメージをどんな形でもいいので身体で表現してくれたらいいなということになった。

〈地域文化継承について〉
目的・・知念地域の自然を感じ地域の文化に興味・関心をもち自分なりの表現する
・今までの話し合い
オオゴマダラを捕まえて、卵から幼虫、蛹と成長の段階を発見をしながら、不思議さや育てる楽しさをかんじることができた。
・この経験をこれから教諭がねらいをもって意図的なあそびの展開を広げることが重要である。(今年は表現を意識していく)
↓
・どのような表現遊びに展開してけるか？

・現在、リズム運動で『ちょうちょ』があるが曲調もゆっくりで優雅な動きなのでオオゴマダラの飛び方に似ているという話になったが、ある子が蝶々の羽をパタパタさせているので本人に聞いてみると「アゲハとかは、羽を動かすの早いんだよ」と言っていた。

オオゴマダラを卵から蝶々にしたことで、職員のなかでも蝶々＝オオゴマダラという意識になってしまっていたが、４歳児クラスではいろんな蝶々を育て観察する中で蝶々にもいろいろあって、飛び方もそれぞれ違うということに気づいて、自分なりに蝶々の動きをイメージしているはずという話が出る。その違いに子ども達が気づいたということもすごいし、それならそれぞれのイメージを自由に表現させてあげたいねということになった。

リズム運動としては、曲に合わせてしなやかな動きを身につけて欲しいというねらいがあるので、そこは自由に表現というわけにはいかない。では自由な発想とイメージで表現をどうさせていけばいいのかという課題が出てきた。まずは音楽もなしで子ども一人一人が持っている蝶々のイメージを聞き出し蝶々になりきることで表現できないかと考える。

〈４歳児クラス　蝶々の表現あそび〉

クラスの蝶々が羽化したタイミングで、５歳児の男の子が４歳児の女の子に「ちょうちょってこんなして飛ぶんだよ」と飛び方をみせていた。そこで担任が「ちょうちょってどんなしてとぶの？」と問いかけると、それぞれが自由にイメージしてやってみせた。蜜を吸ってる蝶々、休憩している蝶々、卵を産んでる蝶々、などいろんな蝶々になりきっていた。

その日の午後、ある女の子がハンカチを２枚持ってきて「結んでほしい」と言うので「何をするの？」と聞くと「ちょうちょの羽を作る」と言う。その結んだハンカチを羽に見立てて遊んでるうちに、丸まって卵、幼虫、蛹、蝶々とハンカチを使って成長の過程を表現していた。その後、羽をチラシで作る子タオルを使って表現する子などそれぞれが自分の思い思いになりきり、イメージを表現して遊んでいた。

〈卵〉

〈幼虫〉

〈蛹〉

〈蝶々〉

ハンカチを蝶々の羽に見立てるだけだと思っていたら、そのハンカチを使って卵から幼虫、蛹から蝶々と成長の過程をすべて表現したことにとても驚いた。

大人が考えつかないことを、子ども達は考えたりひらめいたりすることを体験している。こういう感性を大事にしたいと思った。

〈５歳児クラス　蝶々の表現あそび〉

どんな風に子ども達と表現遊びをするか５歳児のクラス担任で話し合い、今までのクラスで蝶々を捕まえてその蝶々が卵を産んで・・蝶々を羽化させて逃がすという体験したことを子ども達と一緒に振り返り、その後『はらぺこあおむし』の歌なしの音源を使ってやってみようということになった。

子ども達と蝶々を捕まえた時の話からしていくと、「あれはKが捕まえたんだよ」「そしたらひとつの葉っぱにいっぱい卵産んだよね」など子ども達も思い出しながらどんどん言葉が出てきた。その中でもなぜオオゴマダラがあんなに優雅にゆっくり飛ぶのかを知っている子が、みんなの前に立ち「ホウライカガミの葉っぱには毒があって、それを食べるオオゴマダラも毒を持っているから、敵に狙われないんだよ。だからゆっくり飛んでも大丈夫なんだよ。」と伝えていた。

ひと通り、振り返りが終わった後『はらぺこあおむし』の音源をかけてみるとどんな風にしてと言わなくてもそれぞれが思い思いに卵になり、幼虫になる。お腹がすいたと一人の幼虫(子)が部屋の中の黄緑のカラービニールを食べる真似をすると他の子たちも黄緑や緑を探しお腹いっぱい食べる。そして蛹の場面では一人で蛹になる子や、何名か連なって大きな蛹になる子ども達もいる。蝶々になった子ども達が部屋を飛び出し遊戯室で蝶々になりきり飛んでいた。自分たちの実体験と『はらぺこあおむし』の音源とストーリーが重なってクラスみんなで表現あそびを楽しむことができた。

〈蝶々を育てたことを
みんなで振り返り〉

卵って丸かったよね

お腹すいた！食べるもの探そう！

大きな蛹

蛹になって眠るのよ

蝶々になってとぶぞお～

〈蝶々の表現あそびを楽しんだので『胡蝶の舞』の導入〉

蝶々を育てたり、蝶々の表現あそびを各クラスで楽しんだのでそろそろ子ども達に『胡蝶の舞』を見せたいということになった。今年入った職員(５歳児担任)が知名部落の青年会に入り、『胡蝶の舞』を踊ることになったので、ヌーバレー当日の朝にその職員ともう一人青年会の人がこども園に来て、衣装を着て子ども達の目の前で踊ってくれることになった。

その前に一度DVDを観てみようということで、全員で観る。４・５歳児は昨年も観ているが３歳児は初めて。DVDを観た後「J先生が今度、この『胡蝶の舞』を踊るんだよ」という紹介をすると、子ども達から「すご～い」の声が。J先生が少し踊りを見せると子ども達は目をキラキラさせて見る。

その後も、５歳児クラスの子ども達は遊戯室で『胡蝶の舞』をJ先生と一緒に真似て踊ったり、少しアレンジしたりして何度も踊って楽しんでいた。

蝶々、こんなだよね～

〈知名部落のヌーバレーを保護者に情報提供〉

昨年、ヌーバレーが終わってからの取り組みだったので生で見ることも、『胡蝶の舞』という踊りがあるということもあまり保護者に知らせたりすることができなかったのが昨年の課題でもあった。
今年は５歳児担任の先生がヌーバレーで『胡蝶の舞』を踊るので、玄関に貼りだした。

案内を張り出すと、送迎の時に子どもたちが保護者に「見に行きたい～」「J先生が踊るんだって」と伝えたり、知名部落の保護者の方から「小学生がエイサーするので見に来てください」など情報交換もできた。

職員がヌーバレーで『胡蝶の舞』を踊るということで、子ども 達の関心や興味もとてもあり大好きな先生と一緒に楽しみたいという気持ちがあるので子ども達ものりやすい。

〈知名青年会による生の『胡蝶の舞』〉

ヌーバレー当日、青年会の方たちに『胡蝶の舞』を園で見せてもらう。J先生も踊るということで子ども達も朝からとても楽しみにしていた。知念あさひ保育園や保護者にも声をかけたので、知念こども園だけでなく同じ地域の保育園の子どもたちや保護者も一緒に見ることができた。
青年会の人が衣装を着て登場した時は、子ども達から拍手と歓声が上がる。
踊りがはじまると、みんな食い入るようにして観ていた。踊りの後は質問コーナー。
子ども達から質問や感想がたくさんでてきた。

とってもきれいで、かっこよかった！楽しかった！！

何でそんなに上手に踊れるんですか？

最後に衣装を近くで見たいということで、子ども達がそばに行く。触らせてもらったり話をしたりする時間もあり喜んでいた。青年会の人たちも自分たちの舞を地域の子ども達が知って憧れられているというのは嬉しかったのではないかと思う。

〈ヌーバレーを終えて〉

知念地区では、知名部落だけでなく安座真部落、久手堅部落の３つの部落でヌーバレーが行われている。当日、子ども達や職員も各部落のヌーバレーを見に行った。胡蝶の舞だけでなく他にもいろんな伝統の文化がたくさんあると感じた。

ある園児のお迎えに来た祖母が、「知名だけじゃなく、うちの部落にもこんな踊りがあるんだよ」と教えてくれたので「今度、是非子ども達に見せてください」というと「いつでも」という話になった。今回は胡蝶の舞での取り組みではあるが、もちろん地域文化はそれだけではないので、このように保護者の方や地域の方から声をかけてもらえることも嬉しく思う。

こんなふうに、もっと地域とつながっていけたらいいなと感じた。

〈お招き会にて〉９月１３日　　・・動画あり

祖父母を招いてのお招き会の中で、「地域文化継承における幼児教育のテーマで昨年から取り組んでいる」ということと、「５歳児担任の先生が先日のヌーバレーで踊って、その影響で子ども達も少し胡蝶の舞を真似して踊る子も出てきています」ということで急遽、音楽をならしJ先生と一緒に踊ることに。練習は一度もしたことがなかったが、子ども達はJ先生と一緒にとても楽しそうにとても上手に踊っていた。何度も何度も見たわけではないのに、子ども達の中にこんなに踊りが入っていることにとても驚いた。

〈５歳児らいおんぐみの話し合い〉９月２１日　　・・動画あり

運動会で何をやりたいかの話し合いの時に「胡蝶の舞もやりたい」という声がでてきた。

ヌーバレーから少したっていたので、もう一度踊りを見てみようということになり、先日青年会の方が来て踊ってくれた時のビデオをスクリーンに映してみんなで見た。見ながら踊ったり、お友達と楽しそうに見ていた。みんなで見た後、子ども達に感想を聞く。

・とってもかっこよかった
・足がすごかった
・楽しかった
・きれいだった
・蝶々かっこよかった

・どうしてかっこよく踊れたんだろう？

・いっぱい練習したからだと思う
・できると思ってやったから
・心がきれいだから

・なんできれいだったんだろう？

・勇気があるから
・やさしいから

〈踊ってみよう〉

みんなで踊ってみよう！ということになったが、遊戯室が空いていない。さあどうしよう！と子ども達に投げかけると「グループになって、見せ合いっこしよう」ということになった。
それでもスペースが狭いので「だったら、テーブルをどかせばいいんじゃん」と子ども達で考え、それぞれ力を合わせてテーブルを廊下まで運んであっという間に踊るスペースを確保した。

４つのグループに分かれて見せ合う。見せ合う順番も子ども達が決める。
J先生も観客になって、子ども達だけで踊る。子ども達がそれぞれどんなだったっかなあと考えながら、思い出しながら踊っていた。

〈J先生と踊ってみよう〉９月２９日

前回子ども達同士で見せ合いをした時、あんな動きだったかなぁと思い出しながらの踊りだったのでそろそろ子ども達に「胡蝶の舞」を教えてみたらどうかということになった。
一度、ちゃんとした踊りを教えることで自信を持って踊れるようになったり、子ども達同士で教え合ったりするのではないかと考えた。
J先生が、胡蝶の舞の踊りを分かりやすく説明しながら伝えると子ども達もどう踊ればいいのかが分かってきたようだった。ただ動きを何となく真似して踊るという踊り方から、足や手をどうすればいいかなどと少し動きを意識するという動きに変わっていった。

〈踊ってみてどうだった？〉

「J先生と踊ってどうだった？」の問いかけに「楽しかった」「足が疲れた」など意見が出た中、「もっときれいに踊りたい」という子も。「もっときれいに踊るにはどうしたらいいかな？」と聞くと「いっぱい練習する」や「ちょうちょの羽を作る」という声があがる。
それぞれが自分の蝶々の羽を作ることに。「じゃあ、みんなで羽をつけて胡蝶の舞を踊ろう会をしてみない？」と提案すると「さんせい～！」「やりたぁい！」「楽しみ～！」と子ども達。
『胡蝶の舞を踊ろう会』の日を決めて、それまで数日あったので作るタイミングは自分で決めて衣装づくりがスタート。

ねぇ、大きさこれでいいかな？

ここからどんなする～？

切りたいからそっち持っててね～！！

〈胡蝶の舞を踊ろう会〉

子ども達が楽しみにしていた『胡蝶の舞を踊ろう会』当日。「今日、ちょうちょの羽つけて胡蝶の舞踊るんだよね」「楽しみ～」と登園時から子どもたちのわくわくしている様子があった。
自分で作ったそれぞれの蝶々の羽をつけて、みんなで『胡蝶の舞』を踊る準備から。
羽をつける段階で破れたり、壊れたりすることもあるはずと、修正がすぐできるようにテープやガムテープなどを準備しておく。案の定、何名か破れたりせまいなどで手直しする子がいたが、準備をしていたのですぐに直すことができ、みんな羽をつけることができた。
そして、初めて蝶々の羽をつけてみんなで『胡蝶の舞』を踊ることができた。

〈蝶々になりきって遊んでみよう〉

胡蝶の舞を踊った後、蝶々の羽をつけたまま遊んでみようということになり、子ども達に聞いてみると４つほど候補が出て、最近子ども達がはまっている「だるまさんがころんだ」になった。
でも、「だるまさんじゃないよね」という話になり、掛け声をみんなで考え『ちょうちょがわらった』に決定。蝶々の羽をつけたまま何度も「だるまさんがころんだ」の『ちょうちょがわらった』バージョンを楽しんだ。

〈運動会で胡蝶の舞〉

今まで胡蝶の舞を踊ることを自分達で楽しんでいたが、保護者の方に披露するのは初めて。自分達で楽しむだけでなくいろんな人に見てもらって褒めてもらったり感想を聞くことも必要だなと感じた。運動会当日は、それぞれが作ったを蝶々をつけて楽そうに踊っていた。
運動会でも胡蝶の舞を踊ってその後、『ちょうちょがわらった』を楽しんだ。

〈考察〉

昨年と同様、『胡蝶の舞』を題材にし、昨年はどう遊びに発展するかをみたが、今年は子ども達がいろいろな表現を楽しむということをテーマに取り組むことにした。
「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿(１０の姿)」の「豊かな感性と表現」では、「心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気づき、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる」としている。
今回、「感じたことや考えたことを自分なりに表現する」ということ、そして子ども達が「主体的に表現を楽しむこと」を大事にして取り組むようにした。
子どもが捕まえた蝶々が卵を産み、そこから幼虫になり蛹になり、蝶になっていくという過程を園児も保護者も一緒に見ることができた体験から、お絵かきや粘土や工作の製作表現を楽しんだ。また卵から蝶になっていく過程を形態模写をしたり、音楽に合わせてそれぞれが表現遊びをしたりした。いろんな表現遊びをした後、部落の青年会に入っている５歳児の担任に、『胡蝶の舞』の踊りを少し見せてもらうことで、今年は先生と一緒に踊りたいという子がたくさんでてきた。最初はそれぞれが思い出しながら自由に踊っていたが、自信をもって踊るためにはちゃんとした振りを教えることも必要ということで、踊りを教えることにした。すると振りを知ったことで、自信をもって踊ることもでき踊りを楽しむようになった。そこから運動会でも踊りたいということで、それぞれ思い思いの衣装も作り初めてたくさんの保護者の前で『胡蝶の舞』を披露することができた。表現を楽しむだけでなく、人に見せるということで、もっときれいに、もっとかっこよくという気持ちが出てきて何度も踊る姿も見られた。披露して、それをいろんな人に見てもらい褒めてもらうことも子どもたちの喜びとなっていた。
今回の取り組みで、日常生活の中での様々な体験、文化から感じ取るものやその時の気持ちを友達や保育教諭等と共有し、表現しあうことを通して、豊かな感性を養うようにすることが大事だということ。子どもが主体的に表現活動に参加できる「環境」や「教材(題材)」を設定することが、「自分なりに表現して楽しむ」ことを引き出したりすることにつながるのだと感じた。